

研究の
ススメ!

すぐそばに産卵地が!
ウミガメの研究なら
高知大学



Contents

【研究のススメ!】
すぐそばに産卵地が!
ウミガメの研究なら高知大学

【研究のススメ!】
人とロボットの“協働”で
より良い看護を実現する

【HELLO! SENPAI】
大学での地域活動を活かして関係人口創出に取り組む!

【カケル大学】四十万市×高知大学

【この授業推してます!】
土佐の海の環境学I: 柏島の海から考える

Kochi University TOPICS



Information

2025年8月10日(日)・11(月)

高知大学朝倉キャンパスが よさこい祭りの演舞場に!

ヤシの木揺れる高知大学朝倉キャンパス、大学と地域がひとつにな
る演舞場です。学生がデザインし、附属特別支援学校の生徒が手作り
するオリジナルメダルも見どころのひとつ。模擬店や来場者特典、カラ
フルな装飾など高知大学ならではの特徴が盛りだくさん。地域とつな
がり、笑顔を引き起こす。大学舞台の演舞場はここだけ!教室を開放し、
涼しい休憩室もありますのでぜひ足を運ぶください。



情報は
よさこいアカウント
Instagramで
発信中



模擬店



もっと高知大学を知るために!

●動画で見る高知大学

「YouTube」・「夢ナビ」で学科紹介や講義動画を視聴できます。



●デジタルパンフレット

大学のパンフレットや各学部の
パンフレットを閲覧できます。



公式SNSで情報発信中!

イベントの情報やキャンパスライフなどをご紹介!学生広報スタッフによる投稿もあります。



高知大学のラジオコーナー

FM 高知 81.6MHz 【毎月】
「Monthly 高知大学」 第4金曜日 10時15分～

放送中

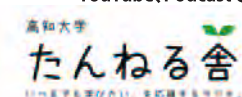
高知大学の教育・研究・地域貢献等の情報をFM高知でお届けしています。
ラジオ聴取用アプリ「radiko」をダウンロードしていただくと、スマホや
パソコンで全国どこでも視聴していただけます。 YouTubeで配信中!



高知大学たんねる舎 〜いつまでも学びたい、を応援するラジオ〜

この番組は、いつでもどこでも、いつまでも楽しく学び続けていきたい
皆さんを応援します。「たんねる」は幡多弁(土佐弁)で、「調べる」、
「探究する」、「訪れる」という意味。「たんねる舎」は、「知を探究し、
知を訪れる学びの場」という想いが込められています。

YouTube、Podcastで配信中!



「高知大学マガジンSRU」 アンケートご協力をお願い

アンケートにご協力いただいた方の中から
抽選で3名の方に高知大学オリジナルグッズ
をプレゼントします。(当選者の発表は賞品の
発送をもってかえさせていただきます)

回答期限: 令和7年10月31日

こちらを
チェック



高知大学広報・校友課 2025年7月発行

〒780-8520 高知市曙町2-5-1

TEL: 088-844-8100

FAX: 088-844-8033

E-MAIL: kh13@kochi-u.ac.jp

広報誌SRU
バックナンバーはこちら



※誌面の学年と役職は
制作時のものです。



高知大学の研究施設からすぐ近くに、四国最大のアカウミガメ産卵地があります。ウミガメのフィードワークに絶好のこの場所で、斉藤知己教授はどのような研究に取り組んでいるのでしょうか。

日本ではアカウミガメ、アオウミガメ、タイマイの3種類のウミガメが繁殖しています。高知県はアカウミガメの産卵地として知られ、なかでも四国で最も産卵数の多いのが高知海岸。そこから車でわずか10分の海に面した場所に、海洋生物研究教育施設があります。

「うれしいことに、大学の施設のすぐ近くで、ウミガメの上陸や産卵を観察で

きます。こうした太字は、全国でもたいへん少ないですよ」と話すのは、30年以上にわたってウミガメの研究に取り組み、齊藤先生。そのキャリアは愛知県の名古屋水族館から始まりました。

同水族館は開館当時から、ウミガメの飼育に力を入れていました。日本で初めて人工環境下で繁殖を成功させようと、巨大な専用施設を設置。560㎡の容量の大水槽に



「うな研究成果を得たいと考えています」と
齊藤先生は力を込めて話します。

藤先生は力を入れて話します。

「上陸や産卵が上向くようなタータも取って、気象条件や海洋環境などと照らし合わせて、ウミガメが産卵するための最適な条件を解明したい。そして砂浜をどう維持

け、孵化にいたる最適な条件などを調べています。

小学生と連携したイベント

ビーチクリーニング

ビーチクリーニング



**子どもをカメ好きにする
楽しいイベントも好評**

斎藤先生は地域に向けた情報発信も積極的に行っています。特に力を入れているのが、高知海岸近くの小学校と連携したイベント。卵が孵化するまで管理し、子ガメを観察する取組や、砂浜の環境を整備するビーチクリーニングなどを行っています。「子どもたちの反応はすごくいい。触って観察することでも、勉強の題材として優れていると考えます。いま研究室の修士2年に、小学生のときにこの活動をしていた学生がいます。しっかりと興味を抱いてくれたことがうれしいですね」

【📷】

齊藤先生は、ウミガメ以外にも専門の領域があります。それは、水族館で最初に担当した深海生物。なかでもオトヒメエビという甲殻類の研究を続けていて、2、3年ごとに新種を発表しています。「じつは、まだ発表していない標本が手元にいっぱいあるんです。加えて去年、大学の実習船が最新型に更新されたので、一層、深い海で採集できるようになりました。早速、新種らしきものが見つかったんですが、忙しくて手が回らない。また2、3年後に発表することになりそうです」

齊藤先生の多忙な研究の日々は、これからまだまだ続きます。

もまだまだ続きます。

ウミガメが入った研究用の水槽

その後あるきっかけから、斉藤先生はより深く研究したいと思うようになりました。水族館で生まれた子ガメは、標識をつけて放流していたのですが、「1995年生まれ」のものが、15年後に長崎県の対馬で捕獲されたんです。驚くことに、飼育が続いていた同じ年生まれと比べると、ふた回りほど小さかった。自分はウミガメのことをまだ全然わかっていない。もっと勉強してみたいと思いました。



加えて、産卵用
に幅5m・奥行
き20mの広大な
砂浜も設けま
した。「私が最初
に受け持ったのは深
海生物。次いでウミガ
メも担当すること
になり、渥美半
島などの産卵地を
調査し、水族館内で
の産卵に備えました。繁殖に成功
したのは、5年ほどたってからです」

これを機会に、研究意欲が燃え上がった
斉藤先生。高知大学に着任したのは、その
2年後、2012年のことでした。

産卵シーズンは毎朝
研究室の学生が日の出から調査

齊藤先生は高知海岸を主なフィールドとし、アカウミガメの上陸、産卵の状況を観察しています。産卵のシーズンは短く、5月から8月上旬まで。この間、研究室で学ぶ学生たちが毎朝、日の出とともに砂浜を調査します。「日が昇ったばかりだと、日差しに角度があります。砂浜の凹凸がよくわかって、産卵した場所を発見しやすいんです」

研究室に所属できるのは、理工学部リキガクの学生のみ。そこで、学部を問わずウミガメに触れられるようにと、斉藤先生と研究室の学生が「かめイズム」というサークルを立ち上げました。こちらは芸西村の琴ヶ浜をメインフィールドに調査しています。

産卵状況を調べているうちにアカウミガメを取り巻く環境の厳しさが浮かび上がってきました。「産卵がどんどん減っているんですよ。高知海岸で調査したなかで、一番多かったのは2013年の88回。それが2023年には6回まで減ってしまいました」

隣の徳島県では産卵の減少が一層顕著。つては「つの浜で、年800回も上陸したという記録がありました。が、2023年にはゼロに。なぜ、このようにどんどん減っているのか。原因の一つは混獲だと思います。誤って定置網に入ったり、はえ縄にかかったりして死んでしまふんですね」

もう一つ、産卵地の環境の変化も大きな要因で、斉藤先生は離岸堤に注目しています。例えば、かつて日本屈指の産卵地だった徳島県▶の蒲生田海岸。農地を高潮から守るために

私もウミガメの研究をしています！



孵卵器を覗き込む
山口さん

応用自然科学専攻
博士課程2年
やまぐちのあ
山口永晏さん

愛知県出身で、子どもの頃から名古屋港水族館によく行っていました。あるとき、ウミガメの研究をしている職員さんに、「ばくもこういう仕事がしたい」と話したところ、「大学で研究するという道があるよ」と教えられました。その職員さんが齊藤先生だったんです。別の大学に進学後、ウミガメのシンポジウムに参加したところ、たまたま先生に再会。「大学院から先生のところに行きます!」とお伝えし、高知大学の修士課程に進みました。

研究では、アカウミガメの産卵に適している環境を調べています。「アカウミガメSTRETCH」という国際研究にも2年続けて参加しました。北太平洋海洋流内での回遊の条件を調べるビッグプロジェクトで、大きなフェリーに乗り、太平洋横断の途上で衛星発信機をつけたカメを放流しました。今年は研究室所属の学部4年生が参加します。

将来は水族館で働きたい。僕が斉藤先生に
そうしてもらったように、子どもたちに夢を与
えたいですね。



小学生と連携したイベント



ビーチクリーニング

今年度、海岸調査や海岸環境保護の功績を称え表彰する「海岸功労者」(一般社団法人全国海岸協会)にも選ばれました。

総合研究センター
総合科学系
複合領域科学部門 教授

さい　とう　とも　み
齊藤　知己

京都大学農学部卒業。博士(理学)。1994年から18年間、名古屋港水族館で勤務。2012年、高知大学に着任。ウミガメや甲殻類など海洋生物の生態・繁殖・分類が専門。「研究はもちろん、地域の人たちを巻き込んだ取組にも力を入れていますね」



国際学会の様子

こうした実験によってわかったことが、ロボット活用における「介在者」の必要性です。「ロボットは子どもの声を模していることが多いのですが、音域が高齢者には聞き取りにくい。逆にロボットも高齢者の声を拾いにくいなど、「コミュニケーションに課題があります。そこで、患者や高齢者とロボットの間に立つ看護師や介護士が、うまく楽しめるように誘導したり、危険がないように見守ったりしないといけません。ロボット導入には、介在者としてのスキルを持った人材育成が必要になります」と大坂先生。共同研究の

大坂先生の研究は、共同研究を行った徳島大学のロクシン・ロザーノ名誉教授の「テクノロジーはとても便利なものだが、テクノ

患者への思いやりとテクノロジーが協働する看護へ



人型ロボットを使った健康体操の様子



医学部看護学科長
医療学系看護学部門 教授
おおさか きょうこ

大坂 京子

徳島県出身。川崎医療福祉大学卒業。病院勤務を経て、博士号(工学、看護学)を取得。前任校は徳島大学大学院で、2019年に高知大学に着任。「テレビのドキュメンタリー番組で医療関係者の活躍を見て、人の役に立てる仕事に就きたいと看護師を目指しました。まさか研究者の道に進むとは思ってもみませんでしたが、恩師や多くの人の出会いで続けることができました」



ロジから得られるデータや機械のみに注目して患者を見てみると、本当の患者の姿を見ることはできない」という理論に基づいています。「ロボットを含め、さまざまなテクノロジが医療や介護の現場で使われています。私の研究が目指しているのは、ロボットと看護師が「協働」する未来です。本来に必要とされるのは、患者さんの顔を見て話を聞き、思いやることのできる看護師であることは、今後も、将来も変わらない普遍的なものです。そのためにはロボットの開発だけでなく、看護教育にも力を入れなければなりません」と話します。

今後は専門分野である精神看護の分野でテクノロジを使ったより良い看護について研究したいと考えている大坂先生。一方で、患者の安全を守るためのテクノロジの活用とプライバシーの保護について、患者に配慮できる感性を持った看護師を育てたいとも考えています。「ロボットにはまだまだ課題が多い。でも、可能性も大きい」と語る大坂先生。看護の現場におけるロボットのあり方を探る研究が続きます。

「10数年前、アメリカの病院で自動搬送ロボットが物品を運んでいるのを見て、『こんな時代が来たんだ』と驚きました。同時に病院にロボットが入ってきたら、本当に安全なのか、患者さんは怖がらないか、という疑問も生まれました」と大坂先生。これをきっかけに看護の現場でのロボット導入の可能性を探ることに関心を持ち、当時は研究する人も少なかったことから、ワクワクしながら研究に取り組んだといいます。

病院にロボットがいる、アメリカでの驚きから研究へ

人とロボットの協働“でより良い看護を実現する”

看護の現場で、ロボットはどのように活用すればいいのか。医学部で看護におけるロボットやテクノロジーについて研究する大坂京子教授は、看護師と協働できるロボットのあり方とは何かを探っています。どのような研究を行っているのか、話を聞きました。



アメリカの病院で使用されていた自動搬送ロボット



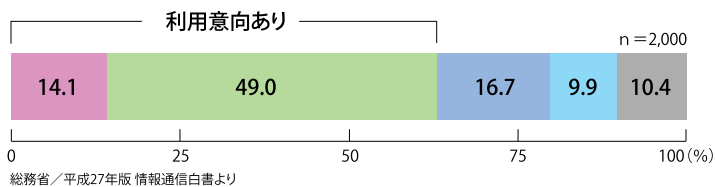
患者とロボットのよい関係は「介在者」によって成立する

近年、高齢化による患者の増加や人手不足に対応するため、医療・看護の世界にロボットの活用を期待する声は高まっています。

「当初は病院で使えるロボットを開発したいと考えていましたが、工学技術の進化のスピードはすごく速く、専門家でなければついていけません。そこで、製品化したロボットをどのように看護の現場に導入すればいいのかに、研究の焦点をシフトしました」と先生。そのため、看護の分野だけでなく、工学や理学療法、法学といったさまざまな分野の研究者やメーカーの開発者などとディスカッションを重ねながら、共同研究を進めてきました。

介護ロボットの利用意向

- 利用したい
- 利用を検討してもよい
- あまり利用したくない
- 利用したくない
- 将来も含めて介護することが必要な状況にない



総務省／平成27年版 情報通信白書より

大坂先生たちが10数年前に医療従事者に行ったアンケート調査では、ロボットに看護は無理と否定的な意見が大半でした。これに対して、2015年の総務省の情報通信白書によると、介護する側、される側ともに60%以上の人がロボットの利用に前向きだという調査結果を公表しています。

活躍する高知大学の先輩に
会いにいきました！

HELLO! SENPAL

Vol.8

人文学部卒
高知市役所 新エネルギー・環境政策課
綿谷有紗さん (旧姓:橋田)

大学での地域活動を 活かして関係人口 創出に取り組む！

学生団体を立ち上げて、
村のNPO法人とコラボ

綿谷さんは高知市生まれ。入学後、地域活動をする学生団体を立ち上げて、精力的に活動しました。卒業後も地元・高知の発展に貢献したいと、高知市役所に就職します。

じつは、高校2年生までは高知のことが嫌いでした。田舎だし、遊ぶところもないから、京都あたりの大学に行こうと思っていた。しかし、担任の先生に「人生はどこの大学に行くかじゃ決まらんぞ。物事に取り組む気持ちが一番だ」と教えられました。この言葉がきっかけで、地元が目に向くように。いつか高知の活性化に貢献したいと、人文学部(現・人文社会科学部)の社会経済学科を受験しました。

入学後、早速、地域活動をしように思いましたが、どうしたらいいのかわからない。同じような思いの友人3人で、活動の場を提

供する学内施設「コラボレーション・サポート・パーク」に相談に行きました。

そこで紹介されたのが、トマトが特産の日高村で福祉や食品製造・販売などを行っている「NPO法人日高わのわ会」。私たちは学生団体「あだたん!!!!」を結成し、日高村での活動を行うようになりました。「あだたん」とは、「収まりきらない」という意味の土佐弁で、学生という枠にとらわれず、主体的に活動していきたいこの思いを込めました。

「わのわ会」さんとの協働を通じて、多くのことを学びました。いまでも続くイベント「日高メシふえすていばる」には、第1回の企画から参加。村の観光施設に併設された飲食店「とまとすたんど」には、毎週末お手伝いに行き、オムライスなどを販売しました。「わのわ会」さんと対話をしながら協働を続ける中で、自分たちから新たな活動を提案できる機会も増えていきました。

人権同和・男女共同参画課。この部署で綿谷さんが経験したユニークな仕事は、小学生を対象にした人権に関する授業でした。

やなせたかし先生がデザインしたキャラクター「人KENまもる君」「人KENあゆみちゃん」。小学校の授業で、その着ぐるみの中に入って、子どもたちに手を振ったりして楽しませる役を務めました。着ぐるみは暑いし、重いんですけど、子どもたちが喜んでくれると楽しいんですよ。この部署では、地域の小学生や高齢者など、幅広い年代の方と一緒に人権啓発に取り組みました。



鏡川沿いを歩きながら環境への理解と参加者との交流を深める企画

高知市役所でまず配属されたのは、ジェンダー平等や人権啓発などを行う

地域とかかわる仕事は、
やりがいしかない！

市役所で働きたいという気持ちは揺るがず、気を取り直して翌年に改めて受け直し、何とか合格。早期入庁し、10月から勤務を始めました。

その後、新エネルギー・環境政策課に異動。この部署では、温室効果ガス排出削減に関する施策の企画など、環境に関するさまざまな政策に取り組んでいます。



第3回「日高メシふえすていばる」で、「わのわ会」さんと記念撮影



新エネルギー・環境政策課では、「あだたん!!!!」のメンバーと一緒に高知市の取組を紹介する動画を作成

わた たに あり さ
綿谷有紗さん

高知市出身。2018年、人文学部社会経済学科を卒業。高知市役所に就職。現在、新エネルギー・環境政策課に勤務。「いま、『わのわ会』さんのホームページでは、『あだたん!!!!』との連携活動について紹介してくださっています。初めてこれを見たとき、うれしくてありがたくて、泣きそうになりました」



地域の高校生たちと清掃活動に取り組んだ朝倉キャンパス近くの鏡川河川敷で撮影

令和3年度から「鏡川流域関係人口創出事業」という取組をスタートさせました。鏡川は高知市を流れる二級河川。上流域では人と自然の適切な関わりが薄れて、美しい景観や自然環境が失われつつあります。その対策として、流域の自然と人をつなぐ「関係人口」の創出と拡大を図ります。関係人口とは、移住や観光ではなく、行き来したり地域にルーツがあったりと、さまざまな形で継続的にかかわる人のことをいいます。

この事業で、綿谷さんがメインで取り組んでいるのが、「スマートフォンアプリ」「まちのコイン(高知市版・ぼっちり)」の広報、普及。地域内で通貨を自由に設定し、地域内外の人の循環を目指す取組です。

「ぼっちり」とは土佐弁でいう「ちょっといい」。鏡川が自然と人の「ちょっといい」関わりを将来につなげたい、という意味を込めて名づけました。利用者がアプリに、鏡川に関連したいろいろな体験を提案し、それに参加して「ぼっちり」という単位のコインを貯めたりあげたりする仕組みです。例えば、「鏡川の清掃活動に参加したら100ぼっちり」といった感じ。ぜひダウンロードして、高知市の自然環境にともに関わっていきましょう！

仕事については、もうやりがいしかないですね。これからも地域の方とかかわっていきたい。地域を実際に見るからこそ気づくこと、提案できることがあるはず。そういう「生の視点」を意識したいと思っています。

地元・高知の発展に貢献したい。この思いを市役所職員として実現している綿谷さん。最後に高知大学の学生、これから受験を考える人に向けて、メッセージを送ってくれました。

何事にも主体的に取り組むことが大事だと思います。高知大学では、とくに地域との関わりについては、背中を強く押してくれます。主体的に取り組む中で出会う仲間や、応援してくださる方々との縁は一生の宝物です。高知大学で経験した地域での学びは、いまにもつながっているし、先生方とはいまも縁が続いており、本当に感謝しています。高知大学に入学して、本当に良かったと思います。



「ぼっちり」を活用した地域協働学部の現地実習

鏡川流域パートナーシップだよりHP



「ぼっちり」の詳細ダウンロード



清掃や交流会、
城跡探検など活動が
広がっています！



四万十市× 高知大学



世界最先端の自然と
調和した海藻産業都市を
目指して。

海藻が切り開く四万十の未来

高知大学が代表機関を務める「しまんと海藻エコイノベーション共創拠点(しまのぼ)」が、科学技術振興機構の「共創の場形成支援プログラム」に採択されました。

四万十市や高知県、学術機関、企業と産学官で取り組むプロジェクトで、海藻の陸上養殖を軸に、地域の未来を切り開こうとしています。

採択は全国から6件のみ 産学官の一大プロジェクト

「しまのぼ」とは、こういったプロジェクトなのでしょくか？計画立ち上げをすすめた、リーダー補佐の難波先生から紹介ください。

難波 未来の望ましい社会像を策定し、その実現に向けた研究開発を行う産学官連携プログラムです。全国の大学から66件の応募があり、2024年10月、「しまのぼ」を含む6件が採択されました。まず、「育成型」という枠組みで2年間取り組み、その成果が承認されると「本格型」に昇格し、以降10年間、中間評価を受けながらプロジェクトが継続します。昇格したら四万十市に高知大学の出先機関を設け、そこを拠点にして、さまざまな研究開発を行う構想を立てています。

「この「しまのぼ」の軸となるのが、プロダクト名にある海藻ということですか。

難波 平岡先生が開発した海藻の陸上養殖は、世界最先端の技術なんです。四万十市と協力すれば、地域の産業が発展し、

地域おこしに貢献できると考えています。いまは毎週、四万十市の担当部署の方とオンライン会議を開き、本格型の採択に向けて、ビジョンをブラッシュアップしている段階です。「本格型」に承認されるように全力を尽くします。

生産量ゼロのノリを復活 バイオマス利用も目指す！

平岡先生に伺います。海藻を使って、どのようなことに取り組むのでしょうか。

平岡 「しまのぼ」には、「環境を保全する」「ビジネスを創る」「人を育てる」という3つのビジョンがあります。これらの実現に向けて、まずは海藻を陸上養殖でどんどん作っていく。四万十市はスジアオノリとヒトエグサ(アオサ)の高知県内一の産地として知られています。しかし、温暖化の影響によって生産量が激減し、3年ほど前からまったく採れなくなってしまうしました。そこで、これらを復活させるように取り組みます。

「しまのぼ」とは「しま」は高知県西部、四万十川流域の四万十市から。「のぼ(nova)」は「新しい」「新星」という意味で、四万十を新しくすることを指す取り組み。

地元ではすでに、平岡先生の技術を使った養殖が行われているのでしょうか。

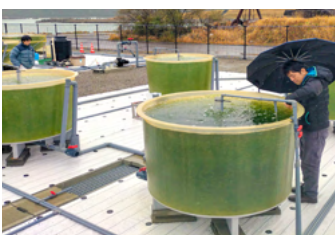
平岡 海のすぐ近くに井戸を掘り、湧き出た水温の低い井戸海水を使うのが、私が開発した海藻の陸上養殖です。この技術を使って、老舗のアオノリ屋さんが四万十川の河口付近で陸上養殖を始めています。「しまのぼ」には高知大学発のベンチャーが4社参加し、スジアオノリの養殖にも1社がかかわっています。

ノリの復活以外に、どのようなことに取り組んでいきますか。

難波 私は薬理系の研究をしていて、以前、平岡先生が育てた海藻を調べたところ、多様なポテンシャルがあることに気づきました。「しまのぼ」の取組では、ミナミアオノリを化粧品など様々な素材として利用したいと考えています。



温室でタンク培養されているミナミアオノリ



四万十にある有限会社加用物産のノリの養殖施設



中村高校でのワークショップの様子

は以前、室戸市で海洋深層水を使ったスジアオノリの陸上養殖を指導した経験があり、四万十市でも人材育成の重責を担います。**菅原** 地元の人に、海藻のことをよく知ってもらうことも大切です。その意味から、今夏、四万十市郷土博物館で行われる企画展「さらたび」の展示に取り組んでいます。地域に伝わるおなじみの一皿に焦点を当てると、この趣旨の企画です。ノリをテーマに、燃料やプラスチックなど、知られていない話題を盛り込もうと思っています。

難波 人の育成について、大学では海藻を使ったビジネスや起業などの講義を行おうと考えています。高校生向けのワークショップなども、積極的に行う必要があるでしょう。

四万十はエコな地域 その未来に向かう

最後に、これからの「しまのぼ」に向けて、意気込みを聞かせてください。

平岡 「しまのぼ」を通じて、人を呼び込みたい。社会の方針としてCO₂削減は大きな目標。しかし経済が回ればCO₂は出る。でも四万十では仕事をするほど環境にやさしい。ここには環境に優しい仕事がありますよ、という流れにしたいですね。

難波 街には清流四万十川が流れて、住民はカーボンニュートラルを目指す。実現できたら、四万十市は環境を守る地域として、世界最先端になれる可能性があります。そういう未来が開けると思っています。取り組んでいきます。

未来への取組「しまのぼ」への思い

四万十川のアオノリとアオサノリが取れなくなった現状において、高知大学とのこの「しまのぼ」による連携は非常に心強く思います。

また、今回のプロジェクトでは産学民とも連携していくことから、アオノリとアオサノリの復活だけでなく、その先を見据えた本市の発展・活性化に大きく貢献していただけるものになると期待しております。

この四万十市が、産業と環境の問題を両立できるモデルシティとなり、全世界へ発信していく場所になるよう、共に取り組んで行きたいと思っています。



四万十市
やま した げん いち ろう
山下 元一郎 市長



次世代地域創造センター
特任助教

すが わら たく や
菅原 拓也

千葉県出身。高知大学大学院理学研究科博士前期課程修了。平岡先生の研究室で学び、室戸市の漁協で海洋深層水を使ったスジアオノリの陸上養殖施設で指導。2年で黒字化に成功する。民間企業勤務を経て、2025年に高知大学へ。「しまのぼ」では現場指導などを担当。「漁業者さんにすぐ期待されて、うれしいですね」

総合研究センター
総合科学系 黒潮園科学部門 教授

ひら おか まさ のり
平岡 雅規

大阪府出身。神戸大学理学部卒業、同大学院中退。愛媛大学連合大学院で博士号(学術)。NEDOフェローを経て高知大学へ。専門は海藻類の生殖生理、海洋深層水の養殖利用、有用海藻増養殖など。「しまのぼ」のリーダーで、「自分の研究がどんどん広がっていく。こう実感できるのはとても楽しい」

農林海洋学部 海洋資源科学科
総合科学系 複合領域科学部門 准教授

なん ば たく し
難波 卓司

岡山県出身。岡山大学薬学部卒業、熊本大学大学院薬学教育部分子機能薬学修士、博士課程。博士(薬学)。ハーバード大学メディカルスクール・マサチューセッツ総合病院博士研究員を経て、2014年、高知大学に着任。「しまのぼ」リーダー補佐で、「企業さんとの共同研究の話も多いし、やりがいを感じます」

高知県とサントリーホールディングス株式会社との「地方創生の推進に向けた連携と協力に関する協定」の締結式が執り行われました

高知大学と高知県、サントリーホールディングス株式会社の3者による「地方創生の推進に向けた連携と協力に関する協定」に係る締結式を、4月18日(金)に高知県庁で執り行いました。本学からは受田浩之学長、堀見和道理事(地域連携・広報・ウェルビーイング担当)及び石塚悟史次世代地域創造センター長が出席し、高知県からは濱田省司知事ら、サントリーホールディングス株式会社からは藤原正明常務執行役員(サステナビリティ経営推進部長)が出席しました。

本協定では、高知県内の地域活性化や持続可能な農業、自然環境保全などの多様な課題に対し、本学が有する地域課題解決力や地域協働による教育研究と、サントリーグループの持つ食品酒類総合企業としての事業・サステナビリティに関する知見を掛け合わせ、産官学で取り組むことで、新たな地域共創モデルを構築するとしています。具体的には、以下の4つの取り組みを推進していきます。

- ① ペットボトル水平リサイクルの推進など資源循環に関すること
- ② 未利用資源を活用した産業振興に関すること
- ③ 環境教育の推進に関すること
- ④ その他地方創生の推進に向けた取組に関すること

締結式では、受田学長より「高知大学が有する知識、地域と協働した教育研究活動を活かし、高知県の地方創生の推進と3者の発展を目指していきたい」と抱負が述べられました。

剣道部女子が第40回西日本女子学生剣道大会(団体戦)で3位入賞し山本笑さんが優秀選手賞を受賞しました

2025年5月24日(土)、久留米アリーナ(福岡県久留米市)において、第40回西日本女子学生剣道大会(団体戦・5人戦)が開催され、本学剣道部女子が3位入賞を果たし、山本笑さんが優秀選手賞を受賞しました。

本大会は西日本地区最大の学生剣道大会で68大学(チーム)が出場しました。

剣道部女子は、準決勝で本大会優勝チームに敗れてしまいましたが、一昨年の3位に続いて2度目の西日本3位入賞となりました。

また、本大会において特に優秀な活躍をした8名に贈られる優秀選手賞に山本笑さん(教育学部3年)が選出されました。



台湾中部南投県政府観光処の陳志賢処長らが受田学長を表敬訪問しました

2025年4月23日(水)、南投県政府観光処の陳志賢処長をはじめとする関係者一行が、受田浩之学長を訪問しました。

南投県は、台湾中部に位置する人口約47万人の内陸県です。台湾最大の淡水湖日月潭(にちげつたん)、台湾最高峰の玉山といった景勝地を活かした観光業や、茶葉・コーヒーなどの農業で知られています。本学は、同県唯一の国立大学である国立暨南国際大学と、日台の地方創生に資する活発な交流を行っています。今回の訪問は、南投県側から、本学を通じて、両大学間交流を両県間交流へと発展させたいという希望が寄せられたことから実現しました。

当日は、受田学長からの歓迎挨拶の後、陳処長及び曾国立暨南国際大副学長による御礼が述べられ、今後の交流に向けた意見交換が行われました。

意見交換においては、地域の大学が自治体にどのように貢献できるか、といったテーマが取り上げられ、受田学長から、自身が高知県の産業振興計画に策定段階から深く関与した事例をもとに、大学と自治体の徹底的な対話が不可欠である旨が語られました。南投県側からは、こうした知見をもとに、まずは両大学が短期交流プロジェクトを実施し、特に観光業や農業分野で、両県と大学が一体となった交流を展開していきたいとの期待が述べられました。

同日午後には、同訪問団による高知県庁訪問と会談が行われるなど、両大学間のみならず、南投県と高知県との交流推進が期待される貴重な機会となりました。



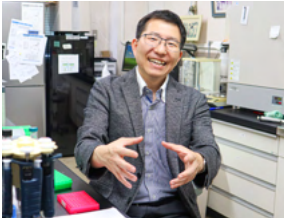
自然科学系理工学部部門の宇田幸司准教授がカワウソの生息について第76回日本動物学会中国四国支部大会にて発表しました

2017年、長崎県対馬において野生のカワウソが撮影され、国内で約40年ぶりとなる生息確認として大きな注目を集めました。2018年には糞からのDNA解析によって生存が科学的に確認されましたが、それ以降は生存を裏付ける明確な証拠は得られていませんでした。

このたび、自然科学系理工学部部門の宇田幸司准教授らの研究グループは、2024年2月に対馬で採取されたカワウソとみられる糞を分析し、そのミトコンドリアDNAの全塩基配列を解読しました。その結果、この個体は韓国に生息するユーラシアカワウソと遺伝的に極めて近縁であり、2017～2018年に確認された個体群と同一の系統に属することが判明しました。これは、対馬において約5年ぶりにカワウソの生息が再確認されたことを示すとともに、これまでに確認された個体が対馬で繁殖していた可能性もあることが示唆されました。

本研究は、対馬におけるカワウソの継続的な生息や定着の可能性を検討するうえで重要な手がかりとなる成果であり、将来的な保全方針や再導入の議論に向けた科学的基盤の一つとなるものです。

この成果は、2025年5月17日に開催された第76回日本動物学会中国四国支部大会(愛媛県松山市)において発表されました。



イベント情報

■黒潮祭 11月1日(土)・2日(日)

朝倉キャンパス(高知市曙町二丁目5番1号)

今年も11月に大学祭「黒潮祭」を開催します。サークル・部活動などによる出店や展示、ステージでのパフォーマンスやよさこい演舞など、2日間盛りだくさんのお祭りになります!関連情報は公式SNSにて随時公開していきます。みなさまのご来場をお待ちしております。



■南風祭 10月12日(日)・13日(月)

岡豊キャンパス(南国市岡豊町小蓮)

医学部の学園祭「南風祭(みなかぜさい)」を開催します。体育館・食堂・図書館前広場を使い、医学部生によるお笑い大会、軽音楽ステージ、管弦楽団や合唱部のコンサート、文化部による作品展示を行います。また、部活による模擬店では、スイーツや軽食を販売予定です。ご家族ご友人をお誘いあわせの上、お気軽にお越しください。



■物部キャンパス一日公開 11月1日(土)9:00～15:00

物部キャンパス(南国市物部乙200)

今年も「物部キャンパス一日公開」を開催します。当日は、物部キャンパスで行われている様々な研究活動を展示・実験・体験コーナー、施設見学等のイベントを通して、地域の皆様にご紹介します。キャンパス特産の野菜や花の販売など、楽しい催しも企画していますので、ご家族・ご友人をお誘いあわせの上、ぜひお気軽にご来場ください。



教育研究活動の紹介(展示・実験・体験)、海洋コア国際研究所公開(世界三大施設の1つ)、農作物・花卉の展示即売会、外国人留学生お国料理・学生自慢料理出店ほか

Q 「土佐の海の環境学Ⅰ: 柏島の海から考える」はどのような授業ですか。

A 高知大学では柏島を研究のフィールドに、海の生態や環境、地域課題などについて、さまざまな共同研究が行われてきました。その成果を教育に活かそうというのが授業の目的です。授業では、生物多様性の豊かな柏島の海の自然や環境、それに関わる人間の生活や社会を題材に、広く海の環境問題とその解決策について、自然科学と社会科学の両面から考えます。およそ10名ほどの学内の教員や外部講師で運営しており、全学部 of 学生が年次を問わず履修できる共通教育科目です(定員制のため、抽選あり)。授業は、オンラインによる座学の講義と柏島での現地実習、そのほかオンラインによる座談会を行います。

この授業推してます!

「土佐の海の環境学Ⅰ: 柏島の海から考える」——高知県南西部の小さな島で自然と地域を学ぶ——

2001年から始まった、歴史の長い人気の授業。開講当時からかわってきたまとめ役の新保輝幸教授に、その魅力について聞いてみました。

Q 座学や実習ではどのような授業が行われますか。

A 座学では、自然科学や社会科学のさまざまな講義を行います。例えば私は環境経済学が専門で、サンゴの海の経済問題について、サンゴ礁を破壊せずに海を利用するにはどうすればいいかななどを話します。海と地域の話を担当するのは、長く柏島で研究・活動をしている神田先生(高知大学の客員准教授もお願いしています)。海洋生物が専門の遠藤広光先生は、大量の写真を使って柏島の海で見られる魚類を紹介するなど、さまざまな学問分野の知見に触れることができます。柏島での現地実習は、シュノーケリングによる海洋生物の観察がプログラムの中心になります。実習では海洋生物を専門とする教員らの指導を受けながら観察することができるので、特に自然や魚が好きな学生には非常に好評な実習です。

お話を聞いたのは…

人文社会科学部
総合科学系 黒潮国科学部門 教授

しん ぼ てる ゆき
新保 輝幸

京都大学農学部卒、同大学院博士課程修了。博士(農学)。1995年高知大に着任、柏島をきっかけに海の環境問題の研究を始め、現在環境経済学を教えている。「柏島からはじまり、南西諸島やフィリピンのサンゴ礁の保全の研究に取り組んできました。最近は宝石さんごの保全の問題にも新しく取り組んでいます。」

参加した学生の声



柏島に実際に訪れて、これほどまでに美しく多様性に富んだ海は知らなかったためとても興味を持ちました。



自分は文系であり、自然環境や魚類といったものにはあまり興味がなかったが、柏島での事例などについて社会科学的な分野も関係があることがわかった。



海の利用方法、環境問題についてより身近に考えることができた。



Q 柏島はどのような場所ですか?



A 柏島周辺の海は造礁サンゴが発達し、日本で現在確認されている魚類の1/4、1,150種もの魚種が生息する生物多様性の豊かな場所です。魚類や海洋をテーマにする研究者にとって、とても魅力的な場所になっています。また昔から漁業が盛んな地域ですが、時代につれ漁業の形も変わり、人口減少や高齢化など、さまざまな課題を抱えています。魅力的なスキューバダイビングのスポットとして有名になり、ダイビング客が増えて過去には漁業者とのトラブルや過剰利用によるサンゴの劣化なども問題になりました。課題の解決には社会科学的な視点も重要となるため、NPO 法人黒潮実感センターの神田優氏と協力して取り組んできました。



Q 授業を通して、何を学んでほしいと思いますか?



A 授業を通じて、専門が違えば同じ問題に関しても違う見方があり、課題解決へのアプローチも学問分野によっていろいろあるということを学べます。環境問題の解決は非常に難しいものです。多様な学問分野が束になって対策を講じないと、解決策は見出しづらい。専門分野を超えて、多角的な視点を持つことの大切さに気づいてもらえればと思います。

